

確保技術 ATC確保器使用時の基本的注意点

—ある事故の教訓から—

熊崎和宏

数年前にドイツ山岳会の編集による『生と死の分岐点』が邦訳され、日本の登山界でも当時相当な話題となった。この本の評価すべき点は、理論のみを並べ立てるだけでなく、実際に起こった現実の事故事例を具体的に列挙し、それを理論づけて説明することによって、登山者に注意を喚起していることにあった。最近私の身近に、このような本があれば是非掲載すべきと思う類の事故が起こったので、この場に発表の機会を作っていたいただいた。

平成10年10月23日、谷川岳一の倉沢烏帽子沢奥壁凹状岩壁の5ピッチ目をトップでリードしていた私の後輩S大山岳部のSは、そこまでランニングビレイピンを1本もとらずに登っていた。彼は2年生とは言え、文登研の3期終了生である。残置ハーケンが見つからなかったからというのが、ランナーをとらずに登っていた理由だそうである。核心部の凹状ピッチを抜け出たところで、初めてチョックでランニングビレイをとり、次の動作に移ったその瞬間、彼の足元にあった人間大の岩が剥がれ、墜落した。ランナーのチョックは外れ、落下係数2の墜落となった。幸いなことに、かぶり気味フェースのおかげで、グランドフォールすることもなく、20mも宙を飛んで止まった。Sの登山靴は脱げてしまっていたそうだが、負傷の程度は左足先の亀裂骨折と裂傷のみで、派手な墜落の割りに怪我の程度は軽かったと言ってもいいだろう。

いまさらここで、ランニングビレイと落下係数の意義を私如きが発表する必要はないが、もう一つの注目すべき問題がビレイヤーの側にあった。ビレイヤーはU大山岳部3年生のNで、彼もやはり文登研3期終了生である。Nは、ATCを使って確保していたのだが、手袋をしておらず、墜落の衝撃がかかり掌中をザイルが流れ始めた途端、あまりの熱さに思わず手を放してしまった！ 当然の如く、彼は手の掌に結構な火傷を負った。手を放してしまったのに、何故墜落者が止まったかというところ、そこに奇跡が起きていたのである。それは、たまたまこんがらがっていたタイムロープの塊が、ATCにゆるく食い込んで、ショックアブソーバーの役目を果たしながら、お互いにさしたる衝撃を伝えることなく止まったというのだ。勿論、タイムロープをこんがらがらせておくという新しい確保技術を発表したい訳ではない。ここで注意すべきは、ビレイヤーが手袋をしていなかったという点にある。

昨今、スポーツクライミングの普及により生じる、本番の岩場での確保技術の誤解がしばしば指摘されているが、スポーツクライミングではATCで確保する場合、手袋をはめて行なう者はまずいないであろう。文登研でも、スポーツクライミングの時にはそのように指導していない。そして実際にトップが墜落しても、スポーツクライミングではランニングビレイピンは強固だし、殆どの場合落下

3. 論文

係数が小さいから、制動確保をせずに苦もなく止めてしまう。この感覚があるため、登山者はずいぶん番の岩場でも、ATC確保なら手袋は必要だとは思わず、使用しない傾向があるのではなかろうか。当然、文登研では屋外人工岩場での確保訓練のときには、肩絡み確保であろうと、ATC確保であろうと手袋着用の必要性を指導している。しかし文登研3期終了生で、実際に確保訓練を何度も経験している者でさえそうなのだから、落下係数が大きい墜落を止めた経験がなければ、多くの人はATC確保の際、手袋を着用していないのではなかろうかと思ったのである。スポーツクライミングでのATC確保の感覚が染み着いてしまった登山者には、ATCが制動確保器であるという事実を忘れがちなのではないだろうか。制動確保をするうえでは、ロープを流さなくてはならないのだから、手袋は必携のはずである。手袋は不要だと思っている人や、あった方がより良いという程度にしか考えていなかった者の結果が、これこの通りという訳である。

今回は、たまたま確保する手を放してしまってもトップは止まったが、こんな奇跡は2度3度と起こるものではない。また今回のケースでは落下係数も大きく、落下距離も長かったため、しっかり手袋を着けていてタイムロープを充分流してしまっていたら、それはそれでトップはやはり身体をどこかに強く打ち着けて大怪我していたかもしれない。落下係数が大きく、落下距離も長い場合は、ロープの弾性に頼ってほとんど流さずに止めようとする確保が必要かもしれないが、その議論はまた別の機会に譲るとして、いずれにせよビレイの際には、手袋それも摩擦に強い指先まで覆える皮革製の手袋は必需品であるという教訓が得られたことをご報告しておく。しかも今回のビレイヤーは、反射的に誘導手の方でも強くロープを握ってしまい、両手の掌に火傷を負ったというから、手袋はきちんと両手にするべきである。

ちなみにSは傷ついた足を引きずりながら、テールリッジを懸垂下降で下り、ひょんぐりの滝も登り返して夜遅くまでかかって自力下山した。2人して反省しきりの毎日だそうである？

(日本山岳会会員)